

## 祖父の死から学んだこと

村上市立山北中学校 3年 大滝 風子

「手、冷たい」

これはわたしの祖父が、最後に言ったことばです。今年の一月、わたしがいつも通り学校から帰ると、家族が深刻な顔をしていました。以前から体調を崩して入院していた祖父の容体が急に悪くなったというのです。わたしたち家族は急いで病院に駆けつけました。病院のベッドに横たわっている祖父は、酸素マスクを付け、とても苦しそうでした。わたしはとっさに手を取り「じいちゃん。」と声をかけました。すると祖父も手を握り返してくれて、わたしに「手、冷たい。」と言ったのです。その後はもうしゃべることもできない状態で、最後のことばを振り絞ったようでした。そして翌日の夜遅く、祖父は亡くなりました。

その後は葬儀の準備などで、家の中が慌ただしくなりました。そんな中、わたしは座敷で、まるで眠っているかのような祖父の手に触れてみました。すると、祖父の手はとても冷たく、祖父が最後に言ったことばを思い出しました。

「手、冷たい。」このことばは、外から病院に駆けつけたわたしのことを、祖父が気遣って言ってくれたことばなのではないでしょうか。祖父は呼吸するのも苦しかったはずなのに、わたしの手が冷たくて、わたしが寒い思いをしているのではないかと心配してくれたのでしょうか。そんな最後まで優しくかった祖父のことを思うと、今でも涙がこみ上げてきます。

祖父が元気だったころは、一緒にスポーツをしたり、散歩に出かけたりしました。昔、中学校の国語の教師だった祖父は勉強や成績のこと、高校のことなど様々なことを私に教えてくれました。祖父のことば一つ一つには重みがあり、私の中に数の名言を残してくれました。しかし、それがもう聞けないとなると何だかすごくさみしいものです。

三日間にわたった祖父の葬儀では、祖父の教え子だという人たちがたくさん来てくれました。わざわざ県外から、線香をあげに来てくれた人もいました。わたしはその様子を見て、祖父はわたしが思っているよりも、すごい人だったんだということに気が付きました。

そして、わたしが祖父の死から学んだことが二つありました。一つは、身近な人の死が、自分を大きく成長させるということです。身近な人の死という悲しみの中で、わたしは知らず知らずのうちに、人前で泣くことを我慢したり、葬儀に来てくれる人に気を遣ったりと、自分でその場の状況を見ながら動いていたように思います。わたしは今まで以上に、周りの人や状況を考えて行動することの大切さに気が付きました。

二つ目は、人生を終えたときこそ、その人の価値がはっきりとわかるということを学びました。祖父の葬儀で涙を流したり、祖父との思い出を語ってくれたりする人たちを見て、祖父がどれほど有意義な人生を過ごしてきたのかという事を感じることができました。

わたしも祖父のように、充実した人生を送っていけるよう、人との関わり方に今まで以上に気を配り、家族や友達と良い人間関係を築いていきたいと思えます。そして、祖父のような思いやりをもって他者と接することのできる人にわたしはなりたいと思えます。